
千年の誓約

鎖波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千年の誓約

【Nコード】

N7003T

【作者名】

鎖波

【あらすじ】

きよはらのあやで清原綾羽はちょっと靈感を持った女子高生。

ある日、陰陽の切れ目に吸い込まれ、飛ばされたのは平安の世。稀代の陰陽師である晴明に運良く拾われた彼女は、弟子となり、式神を1匹従えて、陰陽の歪みを正すように言われるのだが…。

綾羽の生まれ持った霊力は人並みであるが、”見鬼の才”とやらは群を抜いて備わっているらしい。

神泉苑に突如現れた綾羽に京の人々が戸惑う中で、白い衣を身に付けた食えない男——安倍晴明は顔色一つ変えずに、目を細めてそう言った。

「この者は、私の弟子です。京の陰陽の乱れを誰よりも先に視、必ず正してくれるでしょう」

学校帰りに時空の裂け目のようなものに飲み込まれて、未だに状況が掴めないでいる綾羽を置いて、

晴明は言葉巧みに周囲を納得させ、話を進めて行った。

「では、よろしく頼みますよ？綾羽。——それに、貴女の世界に帰りたいでしょう？」

気づけば、晴明特製の札と霊力を高める数珠を渡され、この時代で陰陽師紛いのことをさせられることになってしまった。勿論、綾羽に拒否権はなかった。

——それが、2週間ほど前の話。

自分の大して高くない霊力で御す式神を探しに、西へ東へと京中を駆け巡った結果、人と龍の合いの子を式として従えることに成功した。

ただ彼は、妖力が高く、式として維持するだけで綾羽の霊力を殆ど奪われてしまうので、

綾羽は陰陽の乱れを正しに行っても、見つかるだけでいつも力尽きてしまうのだった。

「おい、綾羽。んなすぐバテんなら、俺との呪を解除したらどうなんだ？」

今日もいつものように陰陽の乱れを発見し、晴明へと報告の式を飛ばして、その場にへたりこむ綾羽に、彼女の式神は呆れるように言った。

上半身裸の背には、艶やかな光沢を持った黒い羽。

それをはためかせながら、式神は――龍熔りゅうとうは自分の情けない主を見た。

彼の縄張りである山にいきなりやって来たかと思えば、彼がどんなに逃げてても逃げても見鬼の力で見つけてしまう。

弱い霊力のくせに、諦めが悪い綾羽を憐れんでやったのが運の尽き。晴明から手渡されていた札と数珠を壊してまで、無理やり呪をかけられ、彼女の式神にさせられてしまったのだった。

そして龍熔という名も、元は名を持たぬ彼に与えられた呪だった。

「ハア…ハア…ぜ…ったい…に、嫌！龍熔はあたしのものなの！

他の式神が使えなくなつて、師匠に馬鹿にされたつて、

なかなか元の時代に帰れなくなつて、離さないんだからね！」

ぜえぜえと肩で息をしながら、地面にへたり込んだ綾羽は、それでも強く龍熔に言う。

妖力の高さしか利点は思いつかないが、龍熔はいやに自分が気に入られてしまったなと思った。

こんな生まれだから、妖からも人からも嫌悪され、ずっと独りだった。

実の父と母は彼が生まれてすぐに死んだ。

だから、ここまで自分に執着してくる綾羽が興味深い。
始めの1週間こそ、式神という状態に抵抗していた龍熔だったが、次第に執着されるのも悪くないなと思い始めていた。

「ふーん、そうか。だが、俺に喉元を食い千切られぬように気をつけろよ?」

龍熔は長く鋭い爪を綾羽に見せつけるように、舐めた。

「肝に銘じておく……」

綾羽は自分の生命の危機を感じながら、乾いた笑みを浮かべた。
そう、誰が手放すものかと思う。

龍熔は妖力の高さは勿論のこと、無造作な黒髪に紫水晶の瞳は美しく、顔の造形も整っている。

背中から生えた龍の翼も、移動の時に運んで貰えるから便利だ。

口元から覗く牙や、鋭い爪は確かに怖いが、

綾羽はそれらが自分を傷つけるようなことは決してないと信じている。

理由などないが、最初の方こそは警戒していたが、彼が優しい妖だと感じているから。

飼い犬に手を噛まれるようなことはあるかも知れないので、
そこんとは油断せずにはいるとは思っているけれども。

「あたしには、龍熔と、管狐たちがいれば、今はまだ十分!
あたしが現代に帰るときは、ここで得た霊力は全部龍熔にあげるからね」

そう言つて、綾羽は地面から立ち上がり、にっこり微笑んだ。
式神にしたときに不承不承といった龍熔を納得させた、霊力の受け渡し。

陰陽師にはなくてはならないものののに、
それをあつさり手放すと言つた綾羽に龍熔は驚いていたが、
綾羽にはそんな力全く必要なかった。

それどころか、昔からちよつと靈感があるせいで、
幽霊とかこの世のならざるものが視えていつも怖い思いをしていたのだ。

流石に、見鬼の才も譲り渡したかつたが、
そればかりは魂に染み着いたものだからと清明に却下された。

「そういう約定だからな。お前の微弱な霊力ですら、俺には極上の餌だ。」

——にしても、道満からの攻撃もなく、近頃は平和だな」

龍熔は腕を組んで、鴨川の方を見た。

陰陽を乱し、清明を陥れるのが、芦屋道満の目的らしい。

その為には、その弟子である綾羽が邪魔で、
度々奇襲がかけられていたのだが、近頃はめつきり大人しい。

「嵐の前の静けさでなければいいがな……」

無駄な労力は使いたくなり龍熔は小さく呟いた。

「何か言つた？ 龍熔」

「いや、何も。……それより、どうして俺の腰に手を回している？」

「疲れちゃったから、運んで貰おつかなーと思って。ダメかな？」

「……従わせればいいだろ、俺を。いちいち訊くな」

「そうなんだけど、それはいやなんだよねえ、乙女的に」

「……やはりお前は、立派にあの狐の弟子だな」

「それ、褒めてないよね？」

何を考えているのか掴みそこねる綾羽に対して、龍熔はどこか感心するように言った。

晴明と同族に扱われた綾羽は、あの憎たらしい澄ました顔を思い浮かべて、苦々しげな顔をする。

それに龍熔は笑って、まあ平和もいいことかと呟いた。

それは、2人の関係が恋にも愛にも発展するまえの話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7003t/>

千年の誓約

2011年9月1日06時12分発行